

近代日本における碑帖論争と内藤湖南

石 永 峰

Naitō Konan and the Controversies over the Stele Study and Rubbing Study in Modern Japan

SHI Yongfeng

In October 1908 (Meiji 41st), Nakamura Fusetsu published *Ryuminjyo* (『龍眠帖』) with his own style, “the Calligraphy of Six Dynasties” (*Rikuchō Shofu*, 六朝書風). After two months, *Ryuminjyo* was criticized by some traditional scholars, such as Inukai Bokudo. The criticism became a special topic in the modern calligraphy theory, which referred to the contradictions between new stele study (碑学) and old rubbing study (帖学). Some scholars and calligraphers, such as Inukai Bokudo, Naitō Konan and Kawai Senro, discussed the pros and cons with Nakamura’s unconventional calligraphy and his calligraphy theory consequently. In particular, Naitō Konan discussed with Nakamura Fusetsu through the art magazines and newspapers, which continued for several years and influenced the calligraphic societies thereafter. In terms of Naitō Konan and the controversies over the stele study and rubbing study, this report goes through the perspective of cultural interaction, which based on the previous researches, focuses the disputation between Naitō Konan and Nakamura Fusetsu, by which using the new materials, and elucidates the standpoint of Naitō Konan and Nakamura Fusetsu. In addition, this report illuminates the difference of the Calligraphy of Six Dynasties between Nakamura Fusetsu and Naitō Konan, and how Naitō Konan judged Kusakabe Meikaku’s theory on the Calligraphy of Six Dynasties.

Keywords: Naitō Konan, Calligraphy theory, Stele Study, Rubbing Study, Nakamura Fusetsu

キーワード：内藤湖南、書論、碑学、帖学、中村不折

はじめに

明治41年（1908）10月、中村不折¹⁾が自己流の六朝書風で書いた『龍眠帖』が出版された。一ヶ月後、

1) 中村不折（1866～1943）、洋画家。本名は鉦太郎。真壁雲郷に南画を、小山正太郎、浅井忠に洋画を学んだ。一時、フランスに渡り、ジャンポール・ローランズに師事し、帰朝後は、太平洋画会を中心に活躍。明治美術会、文展、帝

『龍眠帖』は犬養木堂をはじめとする伝統派から批判を浴び、その後、新旧対立する碑学と帖学を含めて、近代書学書論に関する大議論にまで発展した。犬養木堂（1855～1932）、内藤湖南²⁾、河井荃廬（1871～1945）などの学者、書家から不折の書法と書論をめぐって賛成と反対の両論が続出した。特に内藤湖南と中村不折との論争は、水火相容れず、美術雑誌を中心に新聞も含めて数年も続いており、影響が大きかった。本稿は、先行研究を踏まえ、新しい資料に基づき、内藤湖南と中村不折の論争に焦点を絞り、その経緯及び双方の観点について考察する。また、同じ「六朝書道論」を旗揚げした日下部鳴鶴の説が中村不折とどのように異なるのか、また湖南が日下部鳴鶴の「六朝書道論」に対してどのような見方をしているのかについても考えてみたい。上記の考察を通じて、文化交渉学的な視点から、近代日本の碑帖論争における内藤湖南の役割と位置づけについて考察を試みたい。周知のとおり、湖南は東洋史の専門家であり、その著『東洋文化史研究』の中に有名な書論「北派の書論」「書論の変遷について」が収録されている。この二篇の書論は単に湖南による中国書法断代史研究の専論であるだけでなく、清朝の書の時代性をよく分析した代表的な論述となっている。本稿では、この二篇の書論が近代日本の碑帖論争とどのように関わっているかについても探ってみたい。

本論に入る前に、本稿で言及する碑帖の概念について少し触れておこう。中国書法史上において明末の碑帖研究と清代中期以降の碑帖研究は大きく異なる。この点について、湖南はその著『清朝史通論』第六講「芸術」の「清朝の書家」の一節ですでに説明しており、以降の学界に影響を与えている。すなわち、明末の董其昌時代に碑帖の研究は盛んになったが、当時における「碑」の意味は唐時代の石碑を指し、例えば、欧陽詢、虞世南、褚遂良等の名家が書いたものである。清代道光以後、鄧石如と包世臣を代表とする北碑派の書家は北碑、漢碑を研究し、推奨し、従来の帖学派が尊重する王羲之を中心とする伝統と全く異なる書風を唱導した。これ以後約百年間に渡って碑学派と帖学派では、それぞれ自説にこだわり、他説を攻撃するという対立が続いた。本稿が使用する碑帖という言葉、特に「碑」の内容は明末に研究対象となっていた唐碑を指すだけでなく、清代中期以降の新資料としての北碑及び漢碑をもその中に含めることとする。

一 中国と日本における碑帖論争の時代背景

1 中国における碑学発展の時代背景

周知のとおり、清代の金石学は考証学の一分野として顧炎武あたりに始まり、経史などの校勘に金石

展に出品し、とくに、人物画、歴史画に秀れた。一方、書においても一時代を築いた書家として知られる。俳人の河東碧梧桐とともに六朝風書道を展開し、大正期を中心に新派を築き、人々の注目を集めた。著書に『禹域出土墨宝書法源流考』『孔固亭鑑真』等がある。小松茂美『日本書道辞典』、二玄社、1987年。

2) 内藤湖南（1866-1934）、名は虎次郎、字は炳卿、湖南は号である。秋田師範学校卒業後、綴子小学校の主席訓導に任じ、のち職を去って上京し、『明教新誌』、『日本人』、『大阪朝日新聞』など新聞記者として活躍した。明治40年（1907）に京都帝国大学文科大学東洋史学講座講師、1909年に京都帝大教授。著書『近世文学史論』『東洋文化史研究』『日本文化史研究』『支那史学史』などは『内藤湖南全集』に収録。下中邦彦『日本人人名大事典』、平凡社、1979年。

資料を利用することが盛んとなり、その延長として金石資料、即ち唐碑や漢碑などに見る伝統書道が注目されるようになった。南朝の書法を伝えるものが法帖であるのに対して、北朝の書法を伝えるのが石碑である。

中国の伝統的な書法観として王羲之書法の典型を尊ぶ従来の帖学に対して、阮元（1764-1849）は『南北書派論』、『北碑南帖論』において碑学の理論を提唱し、鄧石如や伊秉綏のような碑派の書家が現れた。のちに包世臣（1775-1855）の『芸舟双楫』を経て、康有為（1858-1927）の『広芸舟双楫』に至って、碑学思潮がさらに拡大し、書学上における帖学（王羲之書法を中心とする）の主導的地位が徐々に奪われるようになった。

碑学が形成されるまで、長期にわたり書を学ぶ人々の間では、阮元の説に賛成、反対、不安、反省などさまざまな意見が現われた。鄧石如と同時期の篆隸名家の錢坫、錢伯垌は、帖学の立場から碑学に反対した。清末の翁同龢も劉墉のあとを追って董其昌にさかのぼり、ふたたび帖学を復興しようとした³⁾。また、碑学が主であっても、そこから帖に入り、逆に帖学から碑に入るような、碑帖兼習者に名手が出ており、その中でも何紹基がとくに著名である⁴⁾。本稿で取り上げる内藤湖南や中村不折などと同時期の名家に楊守敬、羅振玉がいる。楊守敬には古今の碑帖を論じた『激素飛清閣平碑記』、『激素飛清閣平帖記』、『学書邇言』などがある。湖南は楊守敬の学問とともにその書法を推奨しており、楊守敬は同時代の学者の中で最も尊敬される一人であった。

上述のとおり、日本では清代碑学の形成と発展という歴史的段階を経ずに、短期間で碑帖の受容が急速に進められた。これが近代日本に碑帖論争が起った一因でもあると考えられる。

2 日本における碑帖論争の時代背景

日本の書道は、漢字と漢文とともに中国古代の文化を導入し、その中で王羲之、王献之の書法を模範として尊び、この伝統は日本書道史の底流に脈々と受け継がれてきた⁵⁾。江戸時代の書法は、一般庶民の間でいわゆる御家流が普及し、一方では漢学の興隆に伴って唐様が起こった⁶⁾。この二大流派はいずれも王羲之書法の影響を受けていると言ってもよい。大庭脩の研究によると、江戸時代には中国から大量の漢籍が輸入されており、その中でも王羲之書法を多く収録する『淳化閣帖』をはじめ、王羲之書法の後継者である趙孟頫や董其昌の集帖も大量に日本にもたらされた⁷⁾。

明治維新以後、日中間の書法交流はもっとも活発となった。明治早期に渡清した北方心泉、円山大迂は碑学派の書法や篆刻を学び、日本へ新風を伝えたが、後世に与えた影響はさほど大きくない。明治13年（1880）に楊守敬が一万数千点にものぼる碑版法帖を携えて来日したことは、日本近代書法の発端となった。松田雪柯、巖谷一六、日下部鳴鶴らは楊守敬に親炙し、特に一六と鳴鶴は、楊守敬に北派の書

3) 神田喜一郎『中国書道史』、岩波書店、1985年、262-263頁。

4) 宇野雪村『中国書道史』下巻、木耳社、1972年、231-232頁。

5) 小松茂美「日本書道史における王羲之」、『王羲之書蹟大系』、東京美術、1982年。189-208頁。

6) 北川博邦「江戸時代における王羲之風の影響」、『王羲之書蹟大系』、東京美術、1982年。209頁。

7) 大庭脩「江戸時代における集帖の輸入」、『江戸時代における中国文化の受容の研究』、同朋舎、1984年、406-407頁。

法を問いただし、北碑と唐碑、それぞれの長所を融合して清新雄壮な書風を完成した⁸⁾。

光緒14年（1888）康有為は『広芸舟双楫』を出版して包世臣の理論を拡大し、清朝後半の碑学をまとめて大きな成果とした。『広芸舟双楫』は中国で大きな反響を呼んだのみならず、後ほど本稿で紹介するように、中村不折や内藤湖南らによって日本にも紹介され、日本の書壇にも影響を与えた。その後に日本の碑学思潮は、日本の学界や書壇に浸透し、拡大した。中村不折が康有為の碑学理論に共鳴し、井土霊山と共に『広芸舟双楫』を翻訳し、『六朝書道論』と名付けて出版したことから、碑学理論の普及は本格化することとなった。

日本における碑帖論争は、上述した時代背景において行われた。ここで碑帖論争に関わるもう一つの課題「書ハ美術ナラス」論について簡単に触れておこう。これまでの時代と異なって、書法芸術においては中国から輸入するのみならず、明治維新以降においては、政治経済をはじめ、文化芸術の面においても、西洋の影響を受け始めていた。書法に関して言えば、画家の小山正太郎が明治15年（1882）に「書ハ美術ナラス」⁹⁾を『東洋学芸雑誌』に発表し、書を言語の符号と捉え、西洋の芸術観から書は美術ではないと論断した。同年に岡倉覚三は「書ハ美術ナラスノ論を読ム」¹⁰⁾を同誌で発表し、書は「六芸」の一つであることや、中国の書の歴史から東洋と西洋の異同を説明し、小山の「書ハ美術ナラス」に対して反論した。小山正太郎と岡倉覚三の論争は、本質的に言えば、日本の文化芸術界の西洋化が進む背景のもとで、「書とは何か」という基本的な議論であった。

中村不折は、初期に師の小山の「書ハ美術ナラス」論を引き継ぎ、1907年に「書談二則」を発表し、翌年に『龍眠帖』を出版した。犬養木堂をはじめとする伝統派は、中村不折の『龍眠帖』¹¹⁾に対して厳しい批判を浴びせたが、その後、新旧対立の碑帖論争にまで発展した¹²⁾。犬養木堂、中村不折、内藤湖南、河井荃廬、池田秋旻などの学者、書家も不折の書法と書論に対して賛成と反対の両論を展開した¹³⁾。

中村不折が日下部鳴鶴と共に「六朝書道論」を提唱したのに対して、内藤湖南は王羲之を中心とする帖学、筆法及び墨跡の重要性を説いた。大討論の論題は、中村不折の六朝書道論から王羲之の帖学にまで、そして「書ハ美術ナラス」論、刀筆論、方円論、用筆論、墨蹟重視論など書学書道史に関わる広範囲に及び、本家の清朝よりも活発な議論となった。表面上においてお互いの攻守は激しく展開されたよ

8) 杉村邦彦「近代日中書法交流史の時期区分」、『書学叢考』、研文出版、2009年、218-220頁。

9) 小山正太郎「書ハ美術ナラス」、『東洋学芸雑誌』第8-10号、1882年。

10) 岡倉覚三「書ハ美術ナラスノ論を読ム」、『東洋学芸雑誌』第11、12、15号、1882年。

11) 『龍眠帖』に関する研究は以下を参照。杉村邦彦「内藤湖南の学問と書について」『書苑彷徨』（第一集）二玄社、1981年。中村史朗「龍眠会研究初探—彷徨する六朝書道をめぐって—」、『書学書道史研究』26号、2016年。

12) 『手紙雑誌』第7巻、第3号（1908年12月）は「書論是非」を題として、下記の論考を「東京エコー」第1号より転載した。①犬養木堂「書道の復活」②中村不折「犬養氏の書論について」③犬養木堂「不折君は鄙言を誤解せるか如し」④中村不折「犬養氏の駁論を駁す」⑤内藤湖南「不折君の書談について」⑥中村不折「湖南君の駁論に答ふ」。『手紙雑誌』第8巻、第1号（1909年1月）は「続書論是非」を題として、下記の論考を掲載した。①河井荃廬「不折氏の書論を読み」②池田秋旻「不折氏の書談」③魁庵叟「木堂と不折の書論」。

13) 石川九楊「下手な字讀歌——中村不折」、『石川九楊著作集』Ⅷ、ミネルヴァ書房、2017年、91頁。「中村不折の書についての代表的な評語集」によると、不折の書に対して否定派は正岡子規、日下部鳴鶴、高村光太郎、内藤湖南、夏目漱石、斎藤茂吉、芥川龍之介がおり、肯定派は森鷗外、二葉亭四迷、島木赤彦、徳富蘇峰がいた。

うに見えるが、議論参加者らはこの大討論を通して、中国の書論や西洋の芸術思潮を吸収し、近代日本書論史の碑帖論が形成された。

二 内藤湖南と中村不折との論争について

内藤湖南と中村不折との関係および論争については、しばしば先行研究の中で取り上げられている¹⁴⁾。本節は『内藤湖南全集』に収録されていない資料などを利用し、湖南と不折の論争の経緯と影響を考察する。

1 中村不折「書談二則」〔明治40年（1907）6月〕

中村不折は、書の実用性と芸術性を話題として取り上げ、西洋では書を芸術として研究していないと指摘した。「書談二則」は「書の性質」と「王羲之」という二部構成で展開している。「書の性質」において中村不折は、師の小山正太郎の「書ハ美術ナラス」論の基本的観点に基づいて次のように論じている。

書と云うものは元来の目的は自己の意志を現はし、事件を記録する必要から起つたものであるが、其目的以外装飾品として用ひられ、東洋、西洋共に美術の一として模様に使はれて居る……殊に支那では本来の目的以外に使はれる場合多く、日本朝鮮も其餘波を受けて、実用以外六芸の一として立派な芸術として貴ぶ風がある。是は西洋にはない事である。西洋では（中略）書其者を貴い芸術としてまで研究して居らぬ。¹⁵⁾

不折は、書は東洋において「六芸の一として立派な芸術」という伝統的な位置付けを明示しながら、西洋の実用性の視点を踏まえて、西洋においては書を芸術として研究していないと主張した。二年後、不折が書いた「書は美術なりや」¹⁶⁾という文章の中で「書は美術ではない」と断言し、小山の論点を守り続けた。そして、「書の性質」一節の後半において、不折は三代以降の「漢魏六朝」の「記念碑」に着目し、六朝碑のメリットを唐代の書風と比べながら次のように述べている。

六朝の字は飛動変化の態を尽くして居るのが、唐に至って整然として居る。譬へば唐は宰相の風采を備へ、六朝は武将の風骨を帯びて居る。宋、明の末になると、一見変化したやうでも実は六朝、唐あたりの糟粕を嘗めて居るに過ぎぬ。且つ下らぬ形式に拘泥し、筆法の当否に束縛されて少しも

14) 関係先行研究は次のとおりである。①杉村邦彦「内藤湖南の学問と書について」『書苑彷徨』（第一集）二玄社、1981年。②松宮貴之「拮抗する二つの〈東洋〉—明治後期、新聞・雑誌上における内藤湖南と中村不折の確執をめぐって—」立正大学大学院文学研究科『大学院年報』19号、2001年。③西嶋慎一「晋人の風流を追い求めて—京都の書画的風土—」、『京の書：京都書作家協会五十周年記念：特別展京の書の源流をたどる』、京都書作家協会編、2017年。

15) 中村不折「書談二則」『日本美術』100号、日本美術社、1907年6月、15頁。

16) 中村不折「書は美術なりや」『手紙雑誌』第八巻2-3号、1909年3-4月。

活気がなくなつてしまふて居る。¹⁷⁾

つまり、画家としての不折は、六朝書風を武将の風骨に喩え、唐碑を宰相の風采になぞらえて的確にそれぞれの特徴を把握した。しかし、彼の趣味として、「飛動変化の態」、「活気」と筆法に束縛されない自由にあると明白に書いた。結論として「今若し書を研究しやうとする者は遠く古に遡り其根源を尋ねて自由自在なやり方を学ぶべきである」と自分なりの方法論を提示した。

また、不折は「王羲之」の一節において、阮元の理論の影響を受け、王羲之の「神様のような存在」の正統性を疑問視した。理由として「王羲之の楷書「黄庭経」等は晋代の古碑に通有の性質が欠けているにも関わらず、千年の間に何を見ても此点に異議を挿んだものがない」、「唐太宗は二千以上の王羲之の尺牘真跡を集めたが一紙も残っていない」ことを挙げた。不折は、上文の終りに王羲之の書より「原碑」を研究すべきであると結論づけた。不折の「書談二則」が発表された後、すぐに駁論を招くことはなかった。しかし、翌年の10月に中村不折の『龍眠帖』が出版された後、犬養木堂、内藤湖南などが厳しい批判を浴びせた。

2 内藤湖南「不折君の書談に就て」〔明治41年（1908）12月〕

湖南は不折の「書談二則」に対して「不折君の書談に就て」というタイトルで『絵画叢誌』第260号に全く反対の意見を発表した。文の冒頭に次のように書いた。

不折君とは知り合ひではあるが不折君の書に関する意見に就ては感服が出来ぬ。不折君の筆は六朝風などをやらない前には反つて古法に叶つた点があつてよかつたが、六朝をやり出してからは其筆法が尽く作り物になつて一つも古法に叶つて居ない。¹⁸⁾

湖南と不折は、同年輩の有為の青年として地方から上京し、記者の職歴を有するという共通点が多い¹⁹⁾。湖南との交友について、不折は「内藤君とは随分長い間の交際であつた。書学上の見解は時に意見の相違があつたが、それ以外は極めて別懇であつた」²⁰⁾と述べていた。おそらく二人は1890年代の半ばごろに「知り合い」、この文を発表する際に、二人はすでに十年以上の故友であつただろう。そのため、湖南は不折の書風に対しても熟知しているようである。このように湖南は、不折の「六朝風」の書作に対して「古法に叶って居ない」と指摘し、不折の「遠く古に遡り其根源を尋ねて自由自在なやり方を学ぶべきである」という結論に反駁を加え、次のように展開した。

17) 中村不折「書談二則」『日本美術』100号、日本美術社、1907年6月、16頁。

18) 内藤湖南「不折君の書談に就て」、『絵画叢誌』260号、1908年12月、18頁。

19) 湖南は1890年から1893年の間に政教社雑誌『日本人』の記者であつた。不折は1894年に新聞『日本』の記者となり、新聞『小日本』の挿絵を担当し、『日本人』の執筆者として知られる。二人は同じ期間で雑誌『日本人』で務めていないが、同じ雑誌社で地方から上京した同年の青年としてその時から知り合った可能性が大きいと思われる。

20) 中村不折「内藤君と私」、『書芸』第4巻第9号、1934年、21頁。

不折君は六朝風六朝風と云うて居るが君の所謂六朝風なる者は石に顕れた六朝風で筆墨に顕れた六朝風ではない。元来六朝頃迄は紙へかく筆と石へ彫る刀との法が必ずしも一致しては居なかった。それで筆で書いたものを石に移す事になると刀の方で多少筆者の意を改めてゆく。筆法と刀法と一致したのが唐の時代からで……（略）²¹⁾

すなわち、湖南は「遠く古に遡り其根源を尋ねて」に対して、六朝ごろの筆法は刀法の人的要因によって多少変えられたため、六朝碑に現れた拓本のまま学んでも本来の筆法ではないと主張し、筆法を正確な刀法によって忠実に反映できたのは唐の時代に入ってからであると説明した。

湖南の観点はどのようにして成立したのか。実は、1903年に湖南は磯野秋渚とともに篆刻家円山大迂²²⁾を訪問し、円山が六朝から唐代までの筆法と刀法の異同を聞き²³⁾、円山の説に影響を受けたに違いない。また、湖南は、六朝書風が清朝で流行したのは近年のことであり、それまでの集帖から金石文字へ視線を移すと同時に「書法の真を失って居る」と認識した。最後に、日本に多くの碑帖資料をもたらした楊守敬について、湖南は「併し楊守敬だけは日本に居るうちに、多く日本に存して居る古い肉筆を見てその筆意を多少会得した」と紹介し、楊守敬も日本しか伝存しない肉筆資料を重視し、吸収していたことを強調した。

3 中村不折「湖南君の論駁に就て」〔明治41年（1908）12月〕

不折は湖南の駁論に対して、「湖南君の論駁に就て」の文中において、特に「刀法筆法不一致論」を中心に次のように反論した。

湖南君は随分臆断を弄する、六朝頃までは紙へかく筆と石へ彫る刀との法が一致せず唐になると一致して居るとは何を証拠としての論にや、余輩の見所では六朝でも上手な彫刻師が念を入れた碑には紙へかいた其儘と推定すべきものがある。唐と雖も下手なぞんざいなのは石窟の字になつて居るのが造象などには沢山ある（略）……しかし碑の精善なるものは又碑固有の妙味がある。彫工の癖でもなんでもかまはない、面白いのはやつぱり面白い。刀のどうのと詮議をするのは考古学者などの弊といふもの、美術眼から見て面白ければ差支へない。趣味と理屈の境は此時にできるのだ（略）……固より余輩とても肉筆を見られる丈は見得られる丈に得て御手本にしたい冀望はあるが、其は望んで得られない。僅に一部のそれも容易に見ることの出来ぬ処胎経位ではもの足りない（略）。²⁴⁾

21) 内藤湖南「不折君の書談に就て」、『絵画叢誌』260号、1908年12月、18頁。『内藤湖南全集』（筑摩書房、1969-76年）、『内藤湖南未収録文集』（河合文化教育研究所、2018年）未収録。

22) 円山大迂（1838-1916）名は真逸、近代日本の篆刻家である。京都にて貫名海屋の門人となり、経学・書などを学ぶ。明治11年、上海に渡り徐三庚・楊峴に師事し篆刻を学んだ。帰国後、この新しい印風を日本に伝える。詩・書・画にも巧みであった。中井敬所『日本印人伝』（中田勇次郎『日本の篆刻』収録、二玄社、1966年）。

23) 内藤湖南「鉄筆談」、大阪朝日新聞、明治36年2月23日。『内藤湖南全集』第4巻371頁、筑摩書房、1971年。

24) 中村不折「雑録湖南君の論駁に就て」『絵画叢誌』260号、絵画会叢誌部、1908年12月、19-21頁。

つまり、不折は湖南の「刀法筆法不一致論」に証拠がないこと、その時代の彫工の癖を認めること、肉筆資料は少なすぎて研究用には足りないので、六朝の書を研究すべきであると論説した。龍門二十品の中には彫工によって頽れた字があると認めるものの、「何れも形体が古雅で気韻が横溢して居って、たしかに万世の模範たるべきものだ」と康有為の論調を認めつつ、帖学に対しては「碑を排斥すれば集帖に拠るより仕方がない。しかし帖は碑よりもっと乱暴なものだ」と不折は法帖にある重複的な覆刻による字体の変形を鋭く指摘した。

「刀法筆法不一致論」に関する両者の論争には喰い違いがある。そもそも筆法というのは、王羲之の書法を宗とする筆の使い方を指す概念である。それに対して、不折は六朝碑を持ち上げ、「美術眼から見て面白ければ差支へない」と東洋的伝統を無視して西洋美術的な考え方で無理やりに通そうとしたため、議論が噛み合わないまま進んだのである。

4 中村不折「北碑南帖詳説」〔明治42年(1909) 2月〕

中村不折は、「北碑南帖詳説」において、阮元をはじめとする北碑南帖の発展史を論説しただけではなく、上記の湖南との論争を補足した。なぜなら、不折の文中に「近く内藤湖南氏の主張もあり、我々の意見も発表した」と明言しているからである。

不折は王羲之の『黄庭経』、『蘭亭序』から『澄清堂帖』、『昇元帖』、『淳化閣帖』、『停雲館帖』、『戲鴻堂帖』、『三希堂帖』まで、帖の歴史を回顧した。帖は「羲之の真跡を集める」ために作られたが、実際に王羲之の真跡が存在しないことや、成親王の論を借りて²⁵⁾ 王羲之の書に対して疑問を呈した。不折は法帖に対して批判的であるとともに、筆法に対しても次のように述べた。

筆法のことはよくわからぬが、中唐頃からポツポツと萌したやうで、明時代に完成したのだと思ふ。多くは顔真卿の書などを標準にして、点はかく打てとか、一はどう引けとかかいふ詳しいことを教へたもので、甚しいのになると、何かの測量表のやうに寸尺まで明記したのがある。²⁶⁾

つまり、不折は筆法を軽視しているというよりも無視したのである。「湖南君の論駁に就て」にある「刀法筆法不一致論」の駁論に続いて、不折はこの論説において、いわゆる「筆法」というものが「測量表」のようなものだと言った。

法帖と筆法に関する論説の次に、不折は阮元の『北碑南帖論』論について

南帖北碑というて、南朝の書は帖に残り、北朝の書は碑に存するといふ意味ではあるが、この詞も煎じ詰むれば、無意味な詞で、碑と帖とで南北を区別さるべきものではない。寧ろ碑は伝統の正

25) 中村不折「北碑南帖詳説」、『日本及日本人』1909年2月、49頁。不折は「成親王などは「定武は欧なり唐模は褚なり蘭亭何処にかあらん」と頭から罵倒してをる」と述べた。

26) 中村不折「北碑南帖詳説」、『日本及日本人』503号、政教社、1909年2月、52頁。

しい、帖は伝統の曖昧なものであるから、之を正碑偽帖とでも言つた方が適切である。²⁷⁾

とあり、「碑と帖は南北を区別さるべきものではない」を主張したが、帖は「曖昧なもの」で疑わしいものとして「正碑偽帖」論を持ち出した。

最後に、不折は帖派から碑派を攻撃する内容を①碑は多く磨滅し欠損していること、②彫刻工の技術による書体の破壊の二点に反対して、磨滅や欠損をしていない完全な碑は数多くあり、これらのものは参考に値するものであるとの認識を示した。彫刻工の技術について「六朝の書にも盛衰があり、又巧拙があった。碑の彫刻にも亦た栄枯があり敏鈍があったことは争はれぬ」と説明した。

5 内藤湖南「北碑派の書論に就て」〔明治42年（1909）3月〕

湖南は、不折が言及した碑学の名家の中で、包世臣は「北碑を主張しても、全く南帖を排斥するといふ様な事を旨としたのではない」と指摘すると同時に、「北碑派を伝えた最も有力な楊守敬」の書風について「最も佳いものとしては南帖の風を帯びた」との例を挙げて持論を展開した。

また、不折が言及した阮元の北碑南帖論に対して、湖南は阮元の「意見としては寧ろ非常に偏頗なる傾向ある人である」と指摘した。例として阮元は「隋より以前なる晋代に於てをや、固より二王の如き書風のあるべき筈なし」と言ったことを指す。

湖南は、不折が推奨した龍門石刻に対して、「龍門あたりに無暗に多く彫刻してある字恰度我国の神社仏閣に楽書がしてあるような劣悪の字でも、一見趣味あるやうに想はれるのである。其れは固より一種の趣味には相違ないが、芸術上の真の趣味ではなくて唯だ時代がつけた天然の錆である」と厳しい見方を示した。南朝と北朝の書法の優劣について「南北朝の書法も其の巧妙なるものに至りては皆な著るしき差なく、究竟源を南方に発して居るものが勝れて居るといふ結論に到着するのである²⁸⁾」と論じ、湖南は南朝の方が優れていると主張した。

湖南は、不折が「蘭亭序」の正統性を疑問視したことについて次のように述べている。

唐太宗の時代までには搨本は頗る多くあつたといふ説があるけれども、唐太宗が欧陽詢、褚遂良、馮承素等に之を臨書せしめたといふのは、畢竟彼等をして各々其の長所を発揮せしめて、搨模に於て形を伝へて居る以外に尚ほ臨書に依りて其の精神を伝へ、加之も書風の異れる人々に臨書せしめて各方面から蘭亭の真精神を伝へんとしたのは、以て当時の刻石の不満足なることを反証するに足るものである。²⁹⁾

つまり、歴史上において法帖複製の二つの方法、即ち「臨書」と「搨模」それぞれの特徴を説明し、法

27) 中村不折「北碑南帖詳説」、『日本及日本人』503号、政教社、1909年2月、53頁。

28) 内藤湖南「北派の書論に就て」、『日本及日本人』504号、政教社、1909年3月、42頁。『内藤湖南全集』（筑摩書房、1969-76年）、『内藤湖南未収録文集』（河合文化教育研究所、2018年）未収録。

29) 内藤湖南「北派の書論に就て」、『日本及日本人』504号、政教社、1909年3月、41頁。

帖こそ蘭亭序の精神性が伝わっており、「臨書」と「搨模」は筆法研究にとって重要な参考資料だと説明した。

また、石刻の刀法についても補説し、「毛筆の上にては充分に表れるに反し、刻石に於ては刀法の妙を発揮すれば發揮する程此の意味に背馳して行くのでありて、其の筆法と刀法との趣味を両様にして味はねばならぬ所以実に此に存し、又た毛筆を以て石工の真似をすべからざる所以も此に存する³⁰⁾」と毛筆で石刻拓本を臨書するだけでは書者の筆意を吸収できず、そこから乖離するものであると力説した。

6 中村不折「爨龍顔と張遷碑」〔明治42年（1909）7月〕

不折は自分の書に対して「大分賛成する人もあるが、又た一面には攻撃する人もある」との状況を述べ、攻撃者や忠告者たちの「奇体、奇怪、異様」というイメージ、または疑問を解くため、不折は自分の書は独創ではなく、「古来の習慣」であると自論を展開した。

近代日本の有名な書家である澤田東江（1732～1796）、貫名海屋（1778～1863）は、王羲之や空海の字を学んだが、「大分形勢が六朝の風を学ぶようになってきた」と不折が述べている。その後、中林梧竹、日下部鳴鶴、前田黙鳳なども中国へ遊学し、「六朝の書風を学んで帰ってきた」。不折自身は「唯だ古いのが自分等の嗜好趣味に適して」おり、「三国の末から劉宋時代に至る迄の間のものを研究し」と説明した。研究方法について「爨龍顔碑」と「張遷碑」を入手して同時代の石碑を学ぶべきだと力説した。

一体楷書と云ふものは、八分から変形したものであるから、其の八分の全盛時代たる漢に近づくほど、八分より楷書に転じた機密が窺はれる。唐よりは隋、隋よりは齊、齊よりは北魏、北魏よりは宋、宋よりは晋と云ふやうに漢に接近する程八分の遺風が存して居るので、夫れを我々は大変面白く感ずるのである……八分と楷書の変化を学ぶを以て書道の真相を得たるものと思ふ。其研究をやる手本はと云へば、僕は爨龍顔碑と張遷碑とを推挙する。³¹⁾

つまり、不折は阮元と包世臣の説を踏まえて、八分書（隸書）の重要性を説いた。実は、『爨龍顔碑』と『張遷碑』を推挙したのは、自分が書いた『龍眠帖』の正統性を解説する意図があったと考えられる。

7 内藤湖南「北派の書論」〔明治44年（1911）3月〕

前文に紹介したように、湖南は不折との「北碑南帖詳説」を受けて、1909年に「北碑派の書論に就て」を雑誌『日本及び日本人』に発表した。その後、不折は「爨龍顔と張遷碑」を同じく『日本及び日本人』に、自分の趣味の所在、六朝を研究する理由と研究方法を発表し、湖南も北派の書論史を自分なりの理論で紹介し、それぞれの是非を分析した上で自説を展開した。

湖南は、北派の形成について、単に一般論に従って阮元、包世臣、康有為というふうに説明するので

30) 内藤湖南「北派の書論に就て」、『日本及び日本人』504号、政教社、1909年3月、43頁。

31) 中村不折「爨龍顔と張遷碑」『日本及び日本人』513号、政教社、1909年7月、52-53頁。

はなく、それ以前の歴史的背景から考察した。

道光頃からして、書に南北兩派と云ふことが唱へられて、殊に北派の書が漸々流行し掛けて来た……其の書法の一変と云ふものは、僅に百年以来のことであるやうに見えるけれども、其の兆候は明の中頃からして既に見えるのである。³²⁾

つまり、一般的には碑学派は、清代の金石学の形成と発展によって書法に影響を与えたと解説する場合が多いが、湖南は碑学形成の流れを、董其昌の書学理論「作意」と「率意」の言葉を借りて説明している。筆法との関係について、湖南は「作意派の筆法を稽古すると、古来から相伝の筆を用ひ、相伝の法に検束される必要があるけれども、率意派に依ると云ふことになると、総てのものを廢して、さうして勝手に自分で適当な方法と考へた所で、其の筆の用ひ方、筆の作り方も自由にやることができるから、それで一時大に行はれるに至った」と述べ、帖学と碑学の筆法に対する認識の異同を指摘した。

湖南は「即ち旧来の書法は作意の書法にして、さうして明中葉以後の書法は率意の書法である」と祝允明、董其昌らの活躍した時期は、中国書法史において、もっとも大きな転換期と見ている。また董其昌の理論を用いて湖南は、清末書風の変遷、帖学から碑学へと変わる要因は「率意論」の発展であると指摘した。

北派の書論について、阮元、包世臣、康有為の理論によって形成されたという流れについては、不折と同じように見えるが、湖南はそれぞれの説に対して批判または賛成するという独自の見解を披露した。湖南は、阮元の『南北書派論』と『北碑南帖論』は、北派書論の根拠になったものの、間違った論点もあると指摘した。例えば、阮元は王羲之の正書と行書は一般に流通していないと疑っていたが、湖南は西本願寺発掘の李柏文書は行書で書かれている例をあげ、阮元の議論を駁した。包世臣の書論を「極めて綿密に研究した」と高く評価し、世間に「北朝の書を喜んで」いるという印象に対して、湖南は「必ずしも北派を主張して南派を退けると云ふではない」と指摘した。

また湖南は、康有為は北碑を尊ぶが、「阮元に比べては大いに南碑を宝重する」ことを評価した。しかし、康有為の書論と書法に対しては批判的であった。例えば、湖南は「正統派」という伝統的な帖学の視点から康有為は碑の品評において「多く奇僻なものを採って、莊重な端嚴なものは採らない傾向」があり、彼の書も「趣があつて、一種の奇気があるけれども、粗漫を免れない」、「率意に書を作る方の最も極端なるもの」と批判した。

一般には、明治13年（1880）に楊守敬が一万以上の碑帖を日本にもたらし、碑学を日本に伝えたと言われている。これに対して、湖南はそれは日本人の誤解であると指摘した。楊守敬は帖学と碑学両方を研究しているが、帖学派の張照の執筆法を祖述し、北朝の書を書いていないと湖南は説明した。また、楊守敬が来日後に日本に残っている唐代、六朝の真跡の筆意に影響され、その書風が変わったと強調した。

このように、湖南は不折が言及した阮元、包世臣、康有為の碑学論に対してそれぞれの長短を論じ、

32) 内藤湖南「北派の書論」、『大阪朝日新聞』、1911年、3月26日、『内藤湖南全集』第4巻371頁、筑摩書房、1969年、46頁。

特に彼らの不足を指摘した。湖南は、楊守敬が帖学の用筆に基づいて真跡から筆法を悟ることがもっとも大切である、としたことを高く評価して、次のように述べた。

将来は必ず真跡によつて書の一変を来すであらうと思はれる。それも沢山の真跡が表はれて来た結果として、六朝と云ふものも必ずしも尚ぶに足らぬこと、唐代の書と云ふもの、矢張り最も上品な工妙な域に達したと云ふことを悟り得たならば、必ず其の方面に向かつて進むことは明らかである。自分は断言しても宜しい、将来は必ず支那人の書と云ふものは真蹟に向かつて研究を始める。さうして兎に角其の端緒を開いたものは即ち楊守敬であると言っても宜ろしい。³³⁾

湖南の論述は、北派の書論について明代に兆侯が現われたことから、清代における形成と発展を経て、最終的には碑を研究することよりも、むしろ真跡を重視すべきであることに帰結した。

8 論争の特徴と影響

以上、内藤湖南と中村不折との論争を通して、下記の特徴をまとめることができる。すなわち、日本における帖学から碑学への過度期は中国より短く、しかも時期的にやや遅れていた。また、近代日本において出版活動が隆盛になるに伴い、新聞や雑誌という新しい媒体によって論争が展開されることになった。これらの論争内容は、今日なおその時代の雑誌や新聞を通して確認することができる。具体的には『東京エコー』、『手紙雑誌』、『日本美術』、『絵画叢誌』、『日本及日本人』、『大阪朝日新聞』などの雑誌や新聞に掲載され、影響が大きかった。論争は1907年に不折「書談二則」が発表されてから起算すれば、1911年に内藤湖南の「北派の書論」によって一段落ついたかのように見えるが、実は双方の論点が平行線をたどっており、晩年までお互いに妥協や譲歩をしなかった。

不折は、フランス留学の経験を持ち、西洋美術の新しい考え方で書道を研究し、六朝書道の自然な特徴に着眼した。伝統の「永字八法」などの筆法を軽視し、個性や感情を自由自在に表現することを重視する。当時、このようなスタイルは多くの人々に受け入れてもらえなかったが、不折の論調は現代書道に啓蒙的な役割を果たしたといえよう。不折本人にとって、『龍眠帖』の批判に対しては、最初の強烈な駁論から徐々に冷静になり、歴史的な考え方で自論を守り続けた。柳田さやかの研究では、中村不折は師匠の小山正太郎の論点である「書は美術ではない」を引き継ぐ姿勢から、やがて「書は美術である」へと考え方を一変させた。この変化は、ちょうど碑帖論争の時期と重なり、論争の影響も多少あったと考えられる³⁴⁾。「書ハ美術ナラス」論に関して、湖南は最初から「書は美術である」という認識をもち、

33) 内藤湖南「北派の書論」、『大阪朝日新聞』、1911年、3月26日、『内藤湖南全集』第4巻371頁、筑摩書房、1969年、53頁。

34) 柳田さやか「「書ハ美術ナラス」論争の再検討—日本近代書道史上の意義と影響—」、『書論』第40号、書論編集室、2014年。柳田さやかの研究によると、中村不折は1909年に「兎に角書は美術ではない」と断言した（「書は美術なりや」『手紙雑誌』第八巻2-3号、1909年3-4月）が、その後は考えを一変させた。不折の考え方が変更後の論考は次のとおりである。①中村不折「書の自然に帰れ」『書画骨董雑誌』書画骨董雑誌社、1914年2月。「元来書は形式のものであるが、然し又形式に超越した所のものがある。即ち書の精神とでも言うべき、一個の形式以上のあるも

そうした観点が不折に影響した可能性がないとは言えないであろう³⁵⁾。

三 内藤湖南から見た日下部鳴鶴の書論

日下部鳴鶴は、明治三筆の一人と称されるように、書作と書論の両面において明治時代を代表する著名な書家である。すでに紹介した碑帖論争の中で、鳴鶴は不折とともに「六朝書道論」を提唱したが、その中身は異なるものであった。また鳴鶴は、不折の書に対して「殊更にあばれた文字や、変体な文字を書いてえらがつて居るのは、お化けの面を作つて喜んで居るものと同じではないか」と批判した³⁶⁾。それでは、湖南は鳴鶴の書論に対してどのような態度をとったのか。

1 鳴鶴の墨跡重視論

内藤湖南は、碑帖論争において王羲之の書法を尊重し、「粗漫」な石碑より日本に残っている墨跡を重視すべきだという方法を主張した。墨跡重視論は湖南の書論において重要な内容であり、晩年まで変わることがなかった。実は、碑帖論を含めて湖南は日下部鳴鶴の書論に影響を受けていたと考えられる。

明治34年（1901）に湖南は、鳴鶴を訪問し、『大阪朝日新聞』に「黒頭」という筆名で「鳴鶴翁清話」を発表した。この記事において鳴鶴は、包世臣の書論を激称したのに対して、康有為の書論と書法を厳しく批判した。

湖南は、鳴鶴邸の壁間に中林梧竹が揮毫した包世臣の論書絶句を見て、そのことをわざわざ記事に書いた。それは包世臣の論書の第九首、「三唐試判俗書胚，習気原従褚氏開。充頌只今留片石，獨無塵染筆端来」である。包世臣は、天宝元年（742）に刻された「唐兗公頌碑」の六朝に近い書風を評価し、褚遂

のがある。西洋のやうな筆筭の鍵の様なものを並べてばかり居るならばいざ知らず、支那においては古へから程度の高い人々が、其の趣味と美術の思想からやり来ったのであって、到底西洋の文字などと同一視すべき性質のものではないのである」。②中村不折「書の美術論」『筆之友』書道奨励協会、1916年8月。「書が美術なりや否やと云ふ問題は、容易に議論の盡きない問題である……此意味に於て私は書を矢張一つの美術品と見て居るのである」。③中村不折「美術としての書」『美術之日本』第八巻12号、審美書院、1916年12月。「上王侯より下庶民に至るまで、一生懸命になって之を習碑、為に書道は益々發達して、裕に美術の資格を具うやうになった。故に書を今日東洋にては立派に美術として主張し得るやうになっているので、西洋に無い美術が東洋にあると解釈してもよいのである」。

35) 湖南の「書ハ美術ナラス」論に関する資料は次のとおりである。①内藤湖南「書論八則」、『秋田魁新報』、1900年。「内藤湖南全集補遺（二）」、『書論』第14号より転載。「書の美術たると否とは、姑らく置き、揮灑趣あり、展觀興あることは、争ふべからず。建築の若き、裝飾の若き、以て美術のはしくれとすべくは、さまでに書をイヂメルほどの事にはあるまじきや。そは兎も角、余は揮灑趣あることは能くせざれども、展觀の興は猶ほ享け得る者なり」。②内藤湖南「清朝史通論、第六講芸術」1915年。『内藤湖南全集』第8巻414頁、筑摩書房、1969年。「今日は清朝文化の主なるものとして、芸術に関する方の御話をしようと思ひます。芸術といふ中にも、いろいろ種類がありますけれども、支那に於きましては書畫を最も主なるものとしなければならぬ」。

36) 石川九楊「下手な字讀歌——中村不折」、『石川九楊著作集』Ⅷ、ミネルヴァ書房、2017年、91頁。六朝書道論における日下部鳴鶴と中村不折との関係に関して、中村史朗の研究がある。（中村史朗「龍眠会研究初探—彷徨する六朝書道をめぐって—」『書学書道史研究』26号、書学書道史学会、2016年、同「書と美術の乖離—言語の表象の行方—」日本フェノロサ学会機関誌37号、2017年）。

良の楷書の「習気」、即ち俗気を批判した。このことについての湖南のコメントは見あたらないが、当時包世臣の論書と中林梧竹の北碑派の書風が大変人気があったと考えられる。包世臣の書論と書法について、鳴鶴は

包慎伯の書論ですが、なかなかよい、其の肉筆の書は、蘇州で満人の文叔といふ人が持て居るのを見たが、ドーモあまり自分の議論でいつてある法則に縛られて居るやうでうまくない。³⁷⁾

と言って、包世臣の書論を称賛したが、書法に関しては、あまりうまくないと批判した。これと対照的に、鳴鶴は康有為について、

私は北方心泉が持て帰られたのを借りて見ました。ヒドイ武断の説が多いので、恰かも康が新学偽経考に六経は皆劉歆が竄乱偽作だと云つてあると同じ筆法で、古銅器といふ者はやはり皆劉歆が贋作だとしてある、けれども一地方ならば格別のこと、支那の各地方から出土する鍾鼎彝器が皆劉歆が贋作だとすると、恐らく一生贋作をしてもやりきれぬ筈のものでない（略）……康有為は又近時の張濂卿の書を激賞して、欧虞褚薛と並ぶべき者とさへ言て居る。ナル程張の書も見したが、よいことはよいが、康がいふ程のものとは思はれぬ（略）……康有為は又包慎伯の執筆法から転化して実指虚掌を変じて豎指虚掌といふことを言つて居る、食指を豎て、筆を支へるのださうだ、随分ヒドイ牽強だ。実際字は書かぬのと見えて下手な書です。³⁸⁾

とあり、湖南は鳴鶴を訪問するまでに鳴鶴の『論書三十首』をすでに読んだに違いなく、その中で最古の墨跡である菩薩処胎経に関する詩に興味を湧いた。鳴鶴は

アレ（菩薩処胎経）は実に珍しい物です、西魏の肉筆といへば恐らく支那にも存してはあるまい、金嘉穗はアレに載つてある別体の字を委しく調べて跋を書いてある。³⁹⁾

と説明している。ちなみに、『論書三十首』の第二十八は次の通りである。

神之所呵護，遺此滄海珠。淋漓忤虎筆，墨皇天下無。

西魏大統十六年、陶忤虎真迹、菩薩処胎経。係僧徹定上人旧藏、今在西京華頂山。六朝墨蹟久絶、彼土從來未曾有著録者、今此經巍然存于我。洵為絶無僅有之宝。余推為宇内真迹第一、亦當非過賞。

37) 内藤湖南「鳴鶴翁清話」大阪朝日新聞、1901年6月24日、7月1日所載。『内藤湖南全集』第4巻、第262頁、筑摩書房、1971年。

38) 内藤湖南「鳴鶴翁清話」大阪朝日新聞、1901年6月24日、7月1日所載。『内藤湖南全集』第4巻、第263頁、筑摩書房、1971年。

39) 内藤湖南「鳴鶴翁清話」大阪朝日新聞、1901年6月24日、7月1日所載。『内藤湖南全集』第4巻、第264頁、筑摩書房、1971年。

經中多奇字異文、與六朝諸碑相符。金嘉穗作跋、極贊揚、考證亦甚確。余別存錄。⁴⁰⁾

湖南は、鳴鶴訪問を通して、書論書法との交流ができたのみならず、包世臣の論書絶句、鳴鶴の『論書三十首』で書法を論ずるスタイルに対しても共鳴する所があったと推測できる。

湖南も数年後に、「論書十二首」、「続論書十二首」を作成し、主に日本書道史に関わる内容を論じた。菩薩処胎經に関するものは「続論書十二首」の第二首に見える。

手編題跋別燈青、孰似松翁眼識靈。不有鳴沙披石室、墨王合属処胎經。

嘉永中、松翁徹上人搜訪関西諸山古經、在寧樂念佛寺獲西魏大統十六年陶件虎写『菩薩処胎經』、唐咸亨四年蘇慶節造『大樓炭經』。文久間、尽以所目睹著録撰『古經題跋』、『訳場列位』二書。明治初年、禹域士大夫来游此間者往往就覽、莫不詫為奇宝未曾有。蓋敦煌石室、西域窟寺之未開、梵莢旧笈未有出其右者也。⁴¹⁾

『菩薩処胎經』の論書詩が示しているように、湖南は真跡の研究を重視することにおいて鳴鶴と意見を一致させている。実はその背後に二人が共に尊重した書家の貫名海屋がいた。湖南が撰文した「鳴鶴日下部先生碑銘」に、鳴鶴が貫名海屋に私淑したことを次のように書いている。

初先生獲菱湖真蹟喜之。雖逮松翁之世、未甚重其書。比知其可重、則松翁已亡。乃訪其門人、百方得其遺訣。謂宜舍集帖而学原碑。学原碑宜參之真蹟。真蹟雖少佳者、我入唐諸公之書具存。益以写經、進而尋繹石刻意致所由、未難邇古法也。於是規撫光明藤后、空海、逸勢諸名蹟、尽得唐法。⁴²⁾

この文から鳴鶴の書法の基礎は唐様であり、具体的には巻菱湖から入り、貫名海屋の書訣を身につけてから、光明皇后、空海、橘逸勢などの墨跡を稽古した後、「唐法」を習得した経緯が紹介された。貫名海屋の書論は、鳴鶴の書風に大きな影響を与えたと強調するとともに、湖南はこのことにも共鳴していると考えられる。

40) 日下部鳴鶴『論書三十首』之二十八、吉村半七発行、1901年。

41) 内藤湖南「続書論十二首」第二首、『内藤湖南全集』第14巻、第312頁、筑摩書房、1976年。

42) 重野宏一「内藤湖南撰「鳴鶴日下部先生碑銘」訳注」、『筑波中国文化論叢』31号、筑波大学中国文学研究室、2012年、166頁。重野宏一の訳文、「当初、先生は巻菱湖の真跡を手に入れて喜んでおられた。貫名松翁の世になってからも、先生はいまだ十分にはその書の価値を重んぜず、ようやくその真価を理解したころには、松翁はすでにこの世にはいなかったのである。そこで先生はその門人たちを訪ね、各地で松翁の遺訣を得たのである。それは次のようなものである。「集帖を置き、まず原碑を学ぶのがよい。原碑を学び、そして真蹟と較べだのがよい。真蹟にはすぐれて立派なものが少ないが、我が国の唐土に渡り学んだ人々の書はいずれも現存している。それゆえに、貴重な書蹟を模写してより一層深め、自ら進んで石刻の意趣の基づく所以を繰り返して追求すれば、いまからでも晋唐の古法に邇することは決して困難なことではないのである」と。そこで先生は松翁のいうとおり、光明藤后、空海、橘逸勢らの名蹟を手本として学び、それによってことごとく唐代の書法を会得するに至ったのである」。

2 尊王風潮に対する鳴鶴の警戒感

大正4年(1915)に日下部鳴鶴は、談書会席上において、六朝と唐代書法について次のように自らの所見を述べた。

六朝書の佳処は、韻が高くして力が強く、雄奇を静穆に寓するを以て妙とする。其短処は字が粗笨で、奇僻寒險の病がある(略)……唐派の書は、初唐の欧陽詢、虞世南、褚遂良初め数名家を除いては、齊整餘りありて力が足らぬ、中唐晩唐に至って、追々俗氣を生じた(略)。⁴³⁾

碑と帖について鳴鶴は、中唐晩唐の書は力が足りずに俗氣が生じたため、六朝書道を学ぶことでこの問題を克服できると主張した。同時に六朝書道にある「粗笨」、「奇僻寒險」の短所に対しても注意を払った。

これは鳴鶴が楊守敬から碑学のことを吸収したからであり、六朝書風に対する最も的確な見解と言える。しかし、京都大阪で興起した王羲之書法や唐代書法尊重のブームに対して、鳴鶴は「双鉤廓填のコロタイプ版が世人の目に入ってから、右軍推尊の餘り、唐派の書熱が漸次京阪方面に盛んになる趨勢が見える」と警戒していた。その背景として、大正2年(1913)4月12、13の両日、「永和九年癸丑」の歳の1560年を記念するため、京都蘭亭会が京都府立図書館において盛大に開催されたことがある。「首唱者」二十八名の一人として、内藤湖南が実質上の主催者でもあった。内藤湖南は、京都蘭亭会の開催をきっかけに、それまでに日本にない王羲之善本法帖のコロタイプを出版し、鳴鶴の証言からもその影響力の大きいことが窺えよう。

大正2年に京都で開かれた大正癸丑蘭亭会の前後に、湖南は羅振玉と共に、王羲之善本法帖を新しいコロタイプの技術で精印することを企画し、博文堂を通して出版した。鳴鶴は京都と大阪で起きた王羲之書法に対する関心が高まることに注意を喚起し、湖南が唱導した尊王羲之論に対しては批判的であったと見られる。

3 湖南から見た鳴鶴の碑帖論

上述のように、湖南は、鳴鶴の書論に対して、賛成と反対の両面から考えていた。貫名海屋の唐様(帖学派)に私淑したこと、日本に残っている古代中国から伝来した『菩薩処胎經』などを重視したことに対して、湖南は賛成するだけでなく一部を吸収して自身の書論に転化した。一方、筆法論を重視する湖南にとって、鳴鶴が唱導した六朝書道論には賛成できなかったに違いない。

鶴鳴は、楊守敬が来日するまでに、貫名海屋の書に私淑し、すでに一流書家として活躍していた。その後、楊守敬に碑帖鑑賞や書技などを学び、唐碑と北碑を融合した上で、独自の書風を築くことができた。楊守敬が帖学と碑学の両方を研究しているように、唐様(帖学派)を基礎に、碑派書風の要素を取り入れて、「碑帖兼学」という方法で書を研究し続けた。しかし、中村史朗が指摘したように、鳴鶴は書

43) 日下部鳴鶴「楊守敬と潘存とに就いて」、(大正四年一月廿四日談書会席上)。井原録之助『鳴鶴先生叢話』、昭文堂、大正14年(1925)、44-45頁。

の組織化をはかるために「六朝書道」というスローガンを打ち出した一面もある⁴⁴⁾。

楊守敬の書論について、湖南は、楊守敬が日本に残っている唐代の写経などの墨蹟を重視し、その筆意を吸収して自身の書風まで取り入れたことに感心した。将来、真跡に向かって書法を研究することが極めて重要であり、その端緒を開いたのが楊守敬であるとした。鶴鳴が、墨蹟の重要性を知りながら、この方向に進んでいないことに対して、湖南は多少違和感を抱いたのではなかろうか。したがって、湖南の王羲之書法、墨跡を尊ぶ論調は、鶴鳴の六朝書道論とは相反する立場にあったと考えられる。

おわりに

本稿で紹介した近代日本における碑帖論争は、1907年6月不折の「書談二則」から1911年3月内藤湖南の「北派の書論」までの間に両者が、新興の碑学（六朝書道論）と伝統的な帖学（王羲之論）をめぐる行なった大議論のことである。また、同じ「六朝書道論」を旗揚げした日下部鳴鶴の説は、中村不折と異なるが、湖南は両者の「六朝書道論」をどのように見たのかを考察してきた。

近代日本における碑帖論争は、基本的に清朝の阮元、包世臣、康有為などの代表的な碑学書論家の論点と、伝統的な帖学書論から展開した議論とでは大きく変わらないが、日本特有の「書ハ美術ナラス」論を含めて、従来清朝の書論家が言及していない日本に残っていた唐代などの写経墨跡や新出土と新発見の西域墨跡などの資料を用いる議論もあり、従来の碑帖論争を超えた部分もあった。しかし、主要な争点は、王羲之を中心とする古法を重視するか、それともいわゆる伝統の筆法が形成するまでの漢晋の石碑を学び、「自由自在」に個性を発揮するかという碑帖をめぐる対立があるため、本稿は敢えて概括的に問題点を捉えようとして「碑帖論争」というタイトルを付けたのである。

湖南は、碑帖論争を通して、碑学と帖学の歴史や特徴などを整理することができた。そして論争に関わった周りの人々だけではなく、自分自身にとっても大きな啓発的な意義があったと考えられる。それは湖南が王羲之書法を尊び、筆法と墨跡を重視する論点を始終貫いたことである。また、この論争はその後における湖南の一連の王羲之研究を準備することにもなったと考えられる。例えば、湖南は、明治42年（1909）3月に「北碑派の書論に就て」を発表した後、同年の11月に「敦煌文書写真展」を企画し、その中で湖南執筆の「温泉銘」の解説において独自の王羲之書法観を系統的に論及した⁴⁵⁾。翌年の明治43年8月に「西本願寺の発掘物」⁴⁶⁾の論考において肉筆資料「李柏文書」を紹介し、王羲之と同じような筆法が見えることを指摘した。また、敦煌文書展の研究成果に基づいて、湖南が書いた最初の王羲之法書題跋「右軍書記跋」が1910年に雑誌『国華』から出版された。

このような一連の研究に基づいて、1911年に湖南は、中国訪問の時に羅振玉から「北宋拓聖教序」を借りて、博文堂から出版した。その際に跋文に「甘為右軍僕役」という立場を世に表明した。この主張

44) 中村史朗「書と美術の乖離—言語の表象の行方—」、『Lotus』日本フェノロサ学会機関誌37号、2017年。

45) 菅野智明「内藤湖南対敦煌拓本〈温泉銘〉之所見—兼論内藤の交友及王羲之書法観」、『饒宗頤教授百歳華誕國際學術研討會會議論文集』、2015年、1419-1426頁。

46) 内藤湖南「西本願寺の発掘物」、『大阪朝日新聞』明治43年8月3-6日。

が碑帖論争を背景として生まれたことは、従来の研究では指摘されてこなかった。京都蘭亭会の前後に、内藤湖南の企画により王羲之法帖5種⁴⁷⁾と智永千字文墨跡を博文堂よりコロタイプで出版し、いずれも湖南の長い跋文を後に附しており、その書法と書論とともに彼の王羲之研究の重要な成果となった。もし、不折との論争が湖南にとっては帖学の立場から攻めることであった言うならば、同時期の王羲之研究は湖南が持論を守ることであったと言える。

「北派の書論」と「書論の変遷について」は湖南の代表的な書論だということは周知のことである。しかし、「不折君の書談に就て」と「北碑派の書論に就て」は、『内藤湖南全集』や『内藤湖南未収録文集』に収録されていないため、「北派の書論」を読む際に、歴史背景、立論動機などのことは容易に理解できる内容ではない。「書論の変遷について」は、昭和7年(1932)に湖南が平安書道会で講演した内容であり、「北派の書論」に基づいてさらに多くの資料を活用してより詳しい論考ができた。したがって、「不折君の書談に就て」、「北碑派の書論に就て」、「北派の書論」、「書論の変遷について」の四稿を合わせて全体的に読まないと、湖南の碑帖観や書論の解明において壁にぶつかるであろう。また、碑帖論争は湖南の思考と論弁によって、個性的な書論スタイルが形成され、20数年経ても平安書道会で話すに値する話題となった。このように湖南の碑帖論は近代日本においても書の時代性を表わす生きたものである。

湖南は、碑帖論争を通して、結果的に碑学のことも深く研究するようになり、近代日本において碑学発展史を率先して論じた学者の一人となった。その後、湖南は新資料に基づいた帖学研究に力を注ぎ、王羲之研究及び関連の成果をあげた。湖南の書論は、碑帖論争が碑学一辺倒の傾向に歯止めをかける効果があり、それによって、帖学の復興や研究が途切れることなく、今日までその伝統が受け継がれることになったのである。

47) 大正癸丑京都蘭亭会の前後において、湖南が書いた王羲之法帖の跋文は次のとおりである。①《南唐拓澄清堂帖》、1912年。②《永師真草千字文》、1912年。③《宋拓定武本蘭亭》、1912年。④《景印唐拓十七帖》、1913年。⑤《北宋拓集王聖教序》、1913年。王羲之法帖に関する湖南跋文の研究は下記を参照。①菅野智明「内藤湖南对敦煌拓本〈温泉銘〉之所見—兼論内藤的交友及王羲之書法観」、『饒宗頤教授百歳華誕國際學術研討會會議論文集』、2015年、1419-1426頁。②石永峰「王学在近代日本—以内藤湖南的王帖題跋为中心」、『中国書法』第354期、中国書法雜誌社、2019年6月、194-197頁。